

同志社大学文化情報学部蔵「新三十六歌仙絵短冊」の紹介

福田 智子

同志社大学文化情報学部蔵「新三十六歌仙絵短冊」（請求番号：911.147/S10300、資料番号226700074。以下、所蔵している学部名にちなみ「文情絵短冊」と略す。）は、歌一首に左方・右方の別と歌人名、そして歌仙絵を描いた短冊、全三十六枚である。現在は「捲り」（屏風や襖などに貼ってあった絵を剥がしたもの）の状態で、大きさは、縦三四・四センチ、横五・八センチ。すべての短冊に、やや雑ながら金泥で雲と梅花の下絵が描かれる。製作年代は江戸時代中期頃か。桐箱（縦三九・五センチ、横九・八センチ、高さ四センチ）に収められているが、専用に作られたものではない。

撰定されている歌人と和歌は、『日本歌学大系』別巻六に「三三三 新中古歌撰〔別〕」として収められている寛文元年（一六六一）版本「中古歌仙」（以下、「寛文版本」と略す。）に重なる。この歌合については、つとに樋口芳麻呂氏『「中古三十六人歌合」考』（『愛知大学国文学』第十七号（一九七七年）

（以下、「樋口論文」と略す。）により考察されている。本稿はこの先行研究の驥尾に付き、「文情絵短冊」の和歌本文をあらためて確認するとともに、歌仙絵については、「寛文版本」との比較検討を手掛かりとして、本文と歌仙絵をその系譜の中に位置づけるものである。

なお、「寛文版本」は、国文学研究資料館「国書データベース」に画像が公開されている書陵部蔵「謠仙部類」（書誌ID 100233391、デジタル請求記号 DIG-KSRM-305301-C、<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100233391/32?ln=ja>）所収『中古謠仙 二』に拠る。

凡例

一、冒頭に、「文情絵短冊」の歌番号を「寛文版本」の歌順に依拠して示す。

一、次に、「文情絵短冊」を翻字する。仮名は通行の字体を用いるが、漢字は字形を生かす。また、できる限り本書の原態を尊重する。

- 1、仮名遣い・反復記号・送り仮名は、底本のままとする。
- 2、濁点は付さない。
- 3、判読できない文字は□とする。

一、「[字母]」では、翻字の和歌本文に即した仮名の字母を示す。漢字や踊り字など、仮名以外の表記には（ ）を、また、散らし書きの改行箇所には／を付す。

一、「[本文異同]」では、「寛文版本」の本文と比較する。表記の相違は示さず、語の異なりのみを「文情絵短冊」―「寛文版本」の順に示す。

一、「[歌仙絵比較]」では、(1) 畳の縁の柄、(2) 歌仙絵の姿勢、(3) 装束・小物に分け、「寛文版本」と比較する。

(1) 四種類に分けられるため、AからEのアルファベットで示す。

(2) 歌仙絵の身体と顔の向きを、大まかに「左」「右」「正面」「背面」に分け、「文情絵短冊」―「寛文版本」の順に示す。なお、() を付して説明を補うこともある。

(3) 装束や小物類については、まず①「文情絵短冊」の着目点を示し、②「寛文版本」の違いを指摘する。

一、「[出典]」では、「文情絵短冊」の和歌がすべて『新古今集』所収歌であることから、これを出典と見て、『新編国歌大観』に拠って部立・歌番号・作者名・詞書を示す。なお、『新古今集』では一連の歌群中の一首で、和歌に直接記載されていない作者名・詞書を示す場合には() を付す。また、「文情絵短冊」の和歌本文との異同も適宜示す。※を付して説明を追加した部分は、新日本古典文学大系11『新古今和歌集』脚注に拠る。

一、「[作者]」では、新日本古典文学大系11『新古今和歌集』所収「人名索引」等を参看し、生没年やその歌人が初めて歌を取られた勅撰集の名などを示す。

一、最後に、本文と歌仙絵について、「文情絵短冊」全体を通じた考察を行う。

【一番】左 後鳥羽院 鶯の啼ともいまたふる雪に枚の葉しろきあふさかの山



〔字母〕(鶯)乃(啼)止毛以末多不留(雪)尔(枚)能(葉)

止路支安不左可乃（山）

〔本文異同〕○あふさかの山―あふさかの関

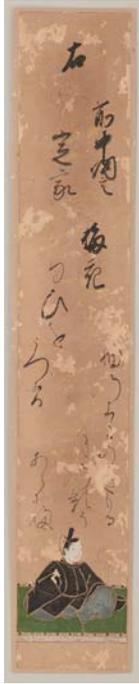
〔歌仙絵比較〕（1）畳の縁A（2）左―左（3）①垂纓冠。

紺青の地に金色の鳳凰文の袍。紅の下襲。紅の長袴。②「寛文
版本」は立烏帽子。茵に座す。

〔出典〕『新古今集』巻第一春歌上、一八番。作者名「太上天
皇」。詞書「和歌所にて、関路鶯といふことを」。結句「逢坂の
山」。※「和歌所」は建仁元年（一一〇一）七月仙洞御所
（当時二条殿）に設置された。

〔作者〕後鳥羽院 八十二代天皇。治承四年（一一八〇）生―
延応元年（一二三九）二月二十二日没。六十歳。『新古今集』
撰進を下命。『新古今集』初出。

〔二番〕右 前中納言定家 梅花匂ひをうつす袖の上にのきも
る月の影そあらず



〔字母〕（梅花）／（匂）比遠／宇川春／（袖）乃（上）尔乃幾毛
留／（月）乃（影）曾／安良所婦

〔本文異同〕ナシ

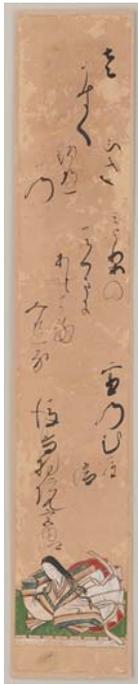
〔歌仙絵比較〕（1）畳の縁B（2）右（左立膝）―右（3）

①垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。左手に笏を持つ
か。②「寛文版本」は下襲の裾を描く。身体の正面に笏を持
つ。

〔出典〕『新古今集』巻第一春歌上、四四番。作者名「藤原定家
朝臣」。詞書「百首歌たてまつりし時」※正治二年（一一二〇
〇）院初度百首の歌。

〔作者〕藤原定家 応保二年（一一六二）生―仁治二年（一一二
四一）八月二十日没。八十歳。俊成男。正二位権中納言に至
る。『新古今集』撰者の一人。千載集初出。

〔三番〕左 後鳥羽院宮内卿 うすくこき野辺のみとりの若く
さにあとまてみゆる雪のむら消



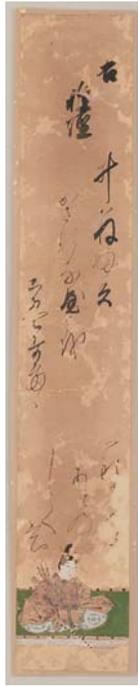
〔字母〕宇寸久／古幾／（野辺）／乃／三止梨乃／（若）久左尔
安止末轉／美遊累／（雪）乃武羅（消）
〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕(1) 畳の縁B (2) 左―左 (3) ①裳。引腰。紅の長袴。②「寛文版本」は裳を描くが引腰は目立たない。

〔出典〕『新古今集』巻第一春歌上、七六番。作者名「宮内卿」。詞書「千五百番歌合に、春歌」。

〔作者〕宮内卿 生年未詳。元久二年(一二〇五)頃夭折か。後白河院安芸女。後鳥羽院女房。新古今集初出。

【四番】右 雅経 むはねふみかさなるやまをこえすて、はなも□□□□あとのしらくも



〔字母〕井八祢婦美／加左那累屋万越／古盈寿帝(、)／八那毛□□□□／安止乃／之良久／裳

〔本文異同〕○雅経―参議雅経 ○こえすて、―わけすて、○はなも (判読不能)―いく重の

〔歌仙絵比較〕(1) 畳の縁B (2) 右―右 (3) ①巻纓冠。綾。黄土色の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。弓矢。②「寛文版本」の表袴は霰紋。

〔出典〕『新古今集』巻第一春歌上、九三番。作者名「藤原雅経」。詞書「和歌所歌合に、羈旅花といふことを」。第三句「わけすてて」。第四句「花もいくへの」。※建仁元年(一二〇

一)三月二十九日、新宮撰歌合「鞆中見花」の歌。

〔作者〕藤原雅経 嘉応二年(一一七〇)生―承久三年(一二二二)三月十一日没。五十二歳。従三位参議。『新古今集』撰者の一人。新古今集初出。

【五番】左 能因法師 山里の春の夕暮きてみれば入あひのかねに花そちりける



〔字母〕山(里)乃(春)能(夕昏)幾(帝三礼八(入)安比乃可年(耳(花)曾(知梨(計留

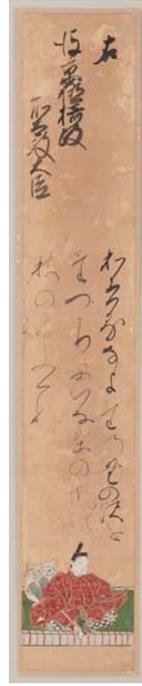
〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕(1) 畳の縁B (2) 左―左 (3) ①僧綱襟。五条袈裟。②「寛文版本」は僧綱襟ではなく直綴。

〔出典〕『新古今集』巻第二春歌下、一一六番。作者名「能因法師」。詞書「山ざとにまかりて、よみ侍りける」。

〔作者〕能因 俗名橘永愷。永延二年（九八八）生。永承五年（一〇五〇）までは生存。文章生。長和二年（一〇一三）頃出家。中古三十六歌仙。後拾遺集初出。

【六番】右 後京極摂政前太政大臣 わするなよたのむの沢を たつかりもいな葉の風の秋のゆふくれ



〔字母〕和春累奈与堂乃無乃（沢）遠／堂川可利母以奈（葉）乃（風）能／（秋）乃由不久礼

〔本文異同〕○後京極摂政前太政大臣―後京極摂政太政大臣

〔歌仙絵比較〕（1）豊の縁C （2）右―右 （3）①垂纓冠。金唐草模様の朱の袍。丸花文の下襲の裾。窠蔽の表袴。紅の大口径。右手に笏。飾太刀。②「寛文版本」は立烏帽子で、下襲の裾を描かない。

〔出典〕『新古今集』巻第一春歌上、六一番。作者名「摂政太政大臣」。詞書「帰雁を」。

〔作者〕藤原良経 後京極摂政・中御門殿。仁安四年（一一一六）生―元久三年（一二〇六）三月七日没。三十八歳。関白兼

実男。慈円の甥。従一位摂政太政大臣。『新古今集』仮名序作者。千載集初出。

【七番】左 皇太后宮太夫俊成 駒とめてなを水かはむ款冬の花の露そふいての玉かは



〔字母〕（駒）止免帝／奈遠（水）／可八無／（款冬）乃（花）／能／（露）曾婦／以天乃／（玉）可八

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕（1）豊の縁B （2）左（右立膝、顔は上向き）―左 （3）①垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。②「寛文版本」では立烏帽子。

〔出典〕『新古今集』巻第二春歌下、一五九番。作者名「皇太后宮大夫俊成」。詞書「百首歌たてまつりし時」。※文治六年（一一九〇）三月、五社百首の内、春日社に奉納された「款冬」題の歌。

〔作者〕藤原俊成 法名釈阿。永久二年（一一一四）生―元久元年（一二〇四）十一月三十日没。九十一歳。定家の父。正三

位皇太后宮大夫。『千載集』撰者。詞花集初出。

【八番】右 寂蓮法師 くれてゆくはるの湊はしらねとも霞に
おつるうちのしはふね



〔字母〕久礼帝／遊久八留乃（湊）八／志良祢止母（霞）／耳／
於徒累／字知乃／之／八不年

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕（1）畳の縁B（2）右―身体はやや背面、顔
は右（3）①僧綱襟。黒地に金色の模様の五条袈裟。②「寛
文版本」で手に持つのは中啓か。

〔出典〕『新古今集』巻第二春歌下、一六九番。作者名「寂蓮法
師」。詞書「五十首歌たてまつりし時」。 ※建仁元年（一一二〇
一）二月、老若五十首歌合の歌。

〔作者〕寂蓮 俗名藤原定長。保延五年（一一三九）頃生か。
建仁二年（一一二〇）七月没。北家長家流、阿闍梨俊海男。伯
父俊成の猶子。従五位上中務少輔。承安二年（一一七二）頃出
家。『新古今集』撰者となるが、撰進前に没。千載集初出。

【九番】左 六條前太政大臣 ほと、きす啼ているさのやまの
は、月ゆへよりもうらめしきかな



〔字母〕本止（、）支須（啼）天以累左能／也末乃者（、）
（月）由部与利毛／宇良免之支可那

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕（1）畳の縁C（2）左―左（3）垂纓冠。黒
の袍。紅の下襲。丸花文の下襲の裾。格子に窠の表袴。飾太
刀。②「寛文版本」では右手で笏を持つ。表袴は霞紋。

〔出典〕『新古今集』巻第三夏歌、二二一番。作者名「前太政大
臣」。詞書「ほととぎすの心をよみ侍りける」。

〔作者〕藤原頼実 六条入道太政大臣。法名顕性。久寿二年
（一一五五）生―嘉祿元年（一二二五）七月五日没。七十一歳。
従一位太政大臣。元久二年（一二〇五）『新古今集竟宴和歌』
に参加。千載集初出。

【二〇番】右 藤原基俊 たまかしはしけりにけりな五月雨に
葉守のかみのしめはふるまで



〔字母〕堂末可之葉新介利尔介梨那／(五月雨)尔(葉守)乃可
三能／志免者布留末天

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕(1) 暈の縁B (2) 右―右 (3) ①菱烏帽子。黄土色の地に亀甲文の狩衣で、赤色の袖括りの緒。②特記事項なし。

〔出典〕『新古今集』卷第三夏歌、二三〇番。作者名「藤原基俊」。詞書「雨中木繁といふころを」。

〔作者〕藤原基俊 康平三年(一〇六〇)生(別伝あり)―永治二年(一一四二)一月十六日没。八十三歳。右大臣俊家男。従五位上左衛門佐。中古六歌仙。金葉集初出。

【二一番】左 従三位頼政 にはのおもはまたかかぬに夕立
の空さりけなくすめる月かな



〔字母〕尔八／乃／於裳／八／末多／可八／加怒尔／(夕立)乃
／(空)散利氣／奈久／寸免留／(月)可奈

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕(1) 暈の縁B (2) 左―身体は左、顔は右(振り返った姿) (3) ①垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。霰紋の表袴。紅の大口袴。飾太刀。②「寛文版本」では菱烏帽子。狩衣で、袖括りの露あり。表袴の文様なし。

〔出典〕『新古今集』卷第三夏歌、二六七番。作者名「従三位頼政」。詞書「夏月をよめる」。

〔作者〕源頼政 長治元年(一一〇四)生―治承四年(一一一八)五月二十六日没。七十七歳。二条院讃岐の父。従三位右京権大夫。以仁王を奉じて平家に敗れ平等院で自害。歌林苑の会衆。詞花集初出。

【二二番】右 大僧正慈円 くもまよふ夕に秋をこめなから風もほに出ぬ萩の上哉



〔字母〕久母末与不(夕)耳(秋)遠/己免那可良(風)毛本
尔(出)怒(萩)乃(上哉)

〔本文異同〕○大僧正慈円―前大僧正慈鎮

〔歌仙絵比較〕(1) 暈の縁B (2) 右(右立膝)―右 (3) 僧綱襟。五条袈裟。丸花文の表袴。②「寛文版本」は横被を描く。

〔出典〕『新古今集』卷第三夏歌、二七八番。作者名「前大僧正慈円」。詞書「夏歌とてよみ侍りける」。

〔作者〕慈円 俗姓藤原。諡号慈鎮。久寿二年(一一五五)生―嘉祿元年(一二二五)九月二十五日没。七十一歳。関白忠通男。兼実の弟。良経の叔父。後白河院・後鳥羽院の護持僧。大僧正。天台座主。千載集初出。

【二三番】左 法橋顕昭 水くきのおかのくす葉も色つきてけさうらかなし秋の初かせ



〔字母〕(水)久支/乃/於可乃/久春/(葉)/毛/(色)徒幾
/帝/希左字良可/那之/(秋)乃/(初)可世

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕(1) 暈の縁B (2) 左(両手は膝の上)―左 (3) ①表衣の上に座すか。白の袴。②「寛文版本」では表衣を着用。

〔出典〕『新古今集』卷第四秋歌上、二九六番。作者名「顕昭法師」。詞書「千五百番歌合に」。

〔作者〕顕昭 大治五年(一一三〇)頃生。承元三年(一二〇九)までは生存。藤原顕輔の猶子。阿闍梨。法橋。『六百番歌合』の俊成判に対抗、『顕昭陳状』を提出。千載集初出。

【二四番】右 鴨長明 秋風のいたりいたらぬ袖はあらした、
われからの露の夕暮



〔字母〕(秋風)乃/以多利/伊多良奴/(袖)八安良之/堂
(、)王礼/加羅乃/(露)乃/(夕)/(昏)

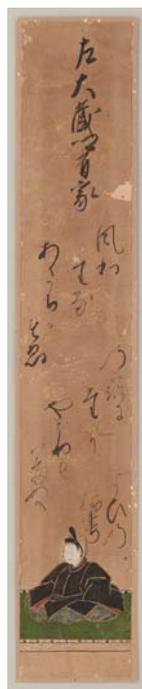
〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕(1) 畳の縁B (2) 右―右 (3) ①立烏帽子。狩衣で、茶色の袖括りの緒。②「寛文版本」では葵烏帽子で狩衣姿。裾を引く。袖括りの緒あり。左手に中啓を持つ。

〔出典〕『新古今集』卷第四秋歌上、三六六番。作者名「鴨長明」。詞書「秋の歌とてよみ侍りける」。

〔作者〕鴨長明 久寿二年(一一五五)生か―建保四年(一一二一六)閏六月没。六十二歳か。鴨御祖神社(下賀茂神社) 柵宜長継男。従五位下。和歌は俊恵に師事。元久元年(一一二〇)出家。千載集初出。

【一五番】左 大蔵卿有家 風わたるあさちかすゑの露にたに
やとりもはてぬよひの稲妻



〔字母〕(風)和/堂累/安左知可/春恵/乃(露)尔/堂耳/
也止利毛/八帝奴/与比乃/(稲妻)

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕(1) 畳の縁B (2) 左―左 (3) ①垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。②「寛文版本」は立烏帽子。子。

〔出典〕『新古今集』卷第四秋歌上、三七七番。作者名「藤原有家朝臣」。詞書「摂政太政大臣家百首歌合に」。※「摂政太政大臣」は藤原良経。

〔作者〕藤原有家 久寿二年(一一五五)生―建保四年(一一二一六)四月十一日没。六十二歳。従三位重家男。従三位大蔵卿。『新古今集』撰者の一人。千載集初出。

【二六番】右 宜秋門院丹後 わすれしな難波の秋のよはの空
ことうらにすむ月はみるとも



〔字母〕王春礼之那／（難波）乃（秋）乃／与八能（空）／已止
字羅尔／寸武／（月）八美留／止毛

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕（1）豊の縁B （2）右―右 （3）①裳。引腰。紅の袴。三盛亀甲と流水に紅葉の表衣。②特記事項なし。

〔出典〕『新古今集』巻第四秋歌上、四〇〇番。作者名「宜秋門院丹後」。詞書「八月十五夜和歌所歌合に、海辺秋月といふこととを」。 ※建仁元年（一一二〇）八月十五夜撰歌合の歌。

〔作者〕宜秋門院丹後 生没年未詳。建永二年（一一二〇七）生存。源頼政の姪。二条院讃岐の従姉妹。九条兼実とその女任子（後鳥羽院中宮・宜秋門院）に出仕。千載集初出。

【二七番】右 皇太后宮太夫俊成卿女 あくかれて寝ぬ夜の塵
のつもるまで月にはらはぬとこの小庭



〔字母〕安久可連帝／（寝）怒（夜）乃（塵）／乃／徒毛留末天
／（月）尔八羅八奴／止已乃／（小庭）

〔本文異同〕○右―左 ○皇太后宮太夫俊成卿女―俊成卿女

〔歌仙絵比較〕（1）豊の縁B （2）身体は左、顔は右―左（両袖を口元に） （3）①梅唐草の表衣。紅の長袴。裳と引腰なし。②「寛文版本」はうねった長い髪を描く。

〔出典〕『新古今集』巻第四秋歌上、四二九番。作者名「皇太后宮大夫俊成女」。詞書「題しらず」。

〔作者〕俊成女 承安元年（一一七一）頃生。建長四年（一一二五二）生存。八十余歳で没か。母は藤原俊成女の八条院三条。俊成の養女。新古今集初出。

【二八番】左 西行法師 きりくす夜さむに秋のなる儘によはるかこ糸のとをさかりゆく



〔字母〕支梨（く）春（夜）左無耳（秋）乃／奈留（俣）丹与八留可己惠能／止越左可利遊久

〔本文異同〕○左―右

〔歌仙絵比較〕（1）晷の縁B（2）右（両手は膝の上）―右

（3）①黒法衣。②「寛文版本」では五条袈裟。左手に数珠。

〔出典〕『新古今集』巻第五秋歌下、四七二番。作者名「西行法師」。詞書「題しらず」。

〔作者〕西行 俗名は佐藤義清。法名円位。元永元年（一一一八）生―文治六年（一一九〇）二月十六日没。七十三歳。鳥羽院の下北面武士。保延六年（一一四〇）出家。詞花集に「誦人しらず」として初出。

【二九番】右 後久我太政大臣通光 曙やかはせのなみのたかせふねくたすか人のそでの秋霧



〔字母〕（曙）也可半勢乃奈美能／堂可世不年久多須可（人）乃／曾帝乃（秋霧）

〔本文異同〕○右―左 ○後久我太政大臣通光―後久我太政大

臣 ○くたすか―わたすか

〔歌仙絵比較〕（1）晷の縁D（2）左―身体は正面、顔は右

（3）①垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花文の下襲の裾。窠霰の表袴。紅の大口袴。飾太刀。②「寛文版本」は立烏帽子で笏を右手に持つ。

〔出典〕『新古今集』巻第五秋歌下、四九三番。作者名「左衛門督通光」。詞書「河霧といふことを」。

〔作者〕源通光 後久我太政大臣。文治三年（一一八七）生―宝治二年（一二四八）一月十七日没。六十二歳。通具の弟。従一位太政大臣。新古今集初出。

【二〇番】左 従二位家隆 露時雨もる山陰の下紅葉ぬるとも
お蘭秋のかたみに



〔字母〕（露時雨）毛累／（山）／（陰）／能／（下紅）／（葉）／奴累
／止／毛／於／（蘭）／（秋）乃／可多三尔

〔本文異同〕○左―右

〔歌仙絵比較〕（1）畳の縁B（2）右（右立膝、両手は左右の膝の上）―右（左立膝に両手を組む）（3）①垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。三つ輪文の表袴。②特記事項なし。

〔出典〕『新古今集』巻第五秋歌下、五三七番。作者名「家隆朝臣」。詞書「千五百番歌合に」。

〔作者〕藤原家隆 保元三年（一一五八）生―嘉禎三年（一二三七）四月九日没。八十歳。従二位宮内卿。嘉禎二年出家。

『新古今集』撰者の一人。千載集初出。

【二一番】右 大納言通具 霜こほる袖にも影はのこりけり露
よりなれし有明の月



〔字母〕（霜）古寶累（袖）尔母／（影）八能己利介里／（露）与
利奈礼之／（有明）能（月）

〔本文異同〕○右―左

〔歌仙絵比較〕（1）畳の縁B（2）正面（右立膝に右手で頬杖をつく）―左（左立膝の上に左手で笏を立てる）（3）①垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。②「寛文版本」は笏を描く。

〔出典〕『新古今集』巻第六冬、五九四番。作者名「右衛門督通具」。詞書「春日歌合に、暁月といふ事を」。※元久元年（一二〇四）十一月十日、春日社歌合の歌。

〔作者〕源通具 承安元年（一一七一）生―嘉祿三年（一二二七）九月二日没。五十七歳。通光の兄。正二位大納言。俊成女との間に具定を儲けるが離別。『新古今集』撰者の一人。新古今集初出。

今集初出。

【二三番】左 藤原秀能 風ふけはよそになるみの片思ひおもはぬなみに啼ちとりかな



〔字母〕(風) 不気八／与楚尔／奈留三乃／(片思) 比於毛八怒奈三／耳／(啼) 知／止利／可奈

〔本文異同〕○左―右

〔歌仙絵比較〕(1) 畳の縁B (2) 右―身体は右、顔は左

(3) ①巻纓冠。綾。群青色の無文の袍。表袴は白地に七曜文か。②「寛文版本」は姿烏帽子で、畳扇を持つ。

〔出典〕『新古今集』卷第六冬歌、六四九番。作者名「藤原秀能」。詞書「最勝四天王院の障子に、なるみの浦かきたるところ」。 ※承元元年(一一〇七)十一月、最勝四天王院障子和歌の歌。

〔作者〕藤原秀能 法名如願。寿永三年(一一八四)生―延応二年(一二四〇)五月二十一日没。五十七歳。後鳥羽院の北面の武士。従五位上出羽守。承久の乱後、出家。新古今集初出。

【二三番】右 式子内親王 さむしろの夜半の衣手さえくはつ雪しろしをかへの松



〔字母〕左無之露乃(夜半)能(衣手)／左衣／(く) 帝／八徒(雪) 志路之／遠可乃部乃／(松)

〔本文異同〕○右―左

〔歌仙絵比較〕(1) 畳の縁A (2) 左―背面 (3) ①菱文の桂。几帳。紅の袴か。裳・引腰見えず。②「寛文版本」は几帳の陰で後ろを向き、茵に座す。脇息あるか。

〔出典〕『新古今集』卷第六冬歌、六六二番。作者名「式子内親王」。詞書「百首歌に」。 ※正治二年(一一〇〇)院初度百首の歌。

〔作者〕式子内親王 久安五年(一一四九)生―正治三年(一一〇二)一月二十五日没。五十三歳。後白河院皇女。平治元年(一一五九)齋院に卜定。嘉応元年(一一六九)七月退下。和歌は藤原俊成に師事。千載集初出。

【二四番】左 崇徳院御製 御狩する片野、御野にふる霰あな
かま、たき鳥もこそたて



〔字母〕(御狩)春留(片野、御野)尔/布留(霰)安奈可末
(、)堂支/(鳥)毛己曾堂帝

〔本文異同〕○左―右 ○崇徳院御製―崇徳院

〔歌仙絵比較〕(1) 暈の縁A (2) 右―右(左袖は顎のあた
り) (3) ①垂纓冠。紺青の地に丸文の袍。紅の長袴。②「寛
文版本」では立烏帽子。茵に座す。

〔出典〕『新古今集』巻第六冬歌、六八五番。作者名「崇徳院御
歌」。詞書「百首歌めしける時」。 ※久安六年(一一五〇)、
久安百首の歌。

〔作者〕崇徳院 第七十五代天皇。元永二年(一一一九)生―
長寛二年(一一六四)八月二十六日没。四十六歳。鳥羽天皇皇
子。実父は白河院という。『詞花集』を下命。詞花集初出。

【二五番】右 後法性寺入道前関白太政大臣 忍ふるに心のひ
まはなけれ共なをもる物はなみた也けり



〔字母〕(忍)不累尔/(心)乃日万盤/奈介礼(共)/奈越毛累
(物)八/奈三多/(也)介利

〔本文異同〕○右―左

〔歌仙絵比較〕(1) 暈の縁D (2) 身体は左、顔は右―左
(3) ①垂纓冠。白地に丸花文の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。
右手に笏。②「寛文版本」では身体の正面に笏を持つ。

〔出典〕『新古今集』巻第十一恋歌一、一〇三七番。作者名「入
道前関白太政大臣」。詞書「百首歌よみ侍りける時、忍恋」。
※治承二年(一一七八)、右大臣家百首の歌か。

〔作者〕藤原兼実 法名円証。久安五年(一一四九)生―建永
二年(一二〇七)四月五日没。五十九歳。関白忠通男。慈円の
同母兄。良経の父。従一位関白太政大臣。建仁二年(一一二〇)
出家。千載集初出。

【二六番】左 二條院讃岐 みるめこそ入ぬる礪のくさならめ
袖さへなみの下にくちぬる



〔字母〕見累免己曾／（入）怒累（礪）乃／久左那良免（袖）左
部奈三乃／（下）尔久知奴留

〔本文異同〕○左―右

〔歌仙絵比較〕（1）畳の縁B（2）右―右（3）裳。引腰。
表衣は丸に三つ星文か。紅の長袴。②特記事項なし。

〔出典〕『新古今集』卷第十二恋歌二、一〇八四番。作者名「二
条院讃岐」。詞書「恋歌としてよめる」。

〔作者〕二条院讃岐 建保五年（一一二七）頃、七十六歳位で
没か。源頼政女。二条天皇に出仕。後に後鳥羽天皇の中宮任子
（宜秋門院）にも。千載集初出。

【二七番】右 後徳大寺左大臣 覚て後夢也けりと思ふにも逢
はなごりのおしくやはあらぬ



〔字母〕（覚）帝（後）／（夢也）／介梨／止／（思）不尔／毛／
（逢）八奈己利乃／於之久也／八／安良怒

〔本文異同〕○右―左

〔歌仙絵比較〕（1）畳の縁D（2）左（右立膝、顔は上向き）
―身体は背面、顔は右（3）①垂纓冠。白地に唐草丸文の袍。
紅の下襲。表袴は丸に三つ輪文か。右手に笏。②「寛文版本」
では表袴は霰紋。左手を下ろし笏の先を持つ。

〔出典〕『新古今集』卷第十二恋歌二、一一二五番。作者名「後
徳大寺左大臣」。詞書「かたらひ侍りける女の、ゆめに見えて
侍りければよみける」。

〔作者〕藤原実定 後徳大寺左大臣。保延五年（一一三九）生
―建久二年（一一九二）閏十二月十六日没。五十三歳。右大臣
公能男。母は藤原俊忠女。正二位左大臣。千載集初出。

【二八番】左 源俊頼朝臣 芦の屋の賤はたおひのかた結ひ心
やすくもうちとくるかな



〔字母〕(芦)乃(屋)乃(賤)者多/於比/農加多(結)比
(心)也春久/母字知/止久留/可那

〔本文異同〕○左―右

〔歌仙絵比較〕(1) 豊の縁B (2) 右―右 (3) ①巻纓冠。
綾。紺地に朱の三つ葉文の袍。紅の下襲。下襲の裾。窠霰の表
袴。紅の大口袴。飾太刀。②「寛文版本」では、綾・下襲の
裾・飾太刀を描かない。丸花文の表袴。左手に笏を持つ。

〔出典〕『新古今集』卷第十三恋歌三、一一六四番。作者名「俊
頼朝臣」。詞書「初会恋の心を」。 ※長治二年(一一〇五)
頃、堀河百首の歌。

〔作者〕源俊頼 天喜三年(一〇五五)頃生か。大治四年(一一
二九)没。大納言経信男。俊恵の父。右近衛少将、左京権大
夫を経て従四位上木工頭となるが、その後散位、出家した。中
古六歌仙。『金葉集』撰者。金葉集初出。

【二九番】右 正三位知家 是もまたなき別となりやせむく
れを待へき命ならねは



〔字母〕(是)裳/末多/奈可幾(別)止/奈利也世無/久礼遠
(待)遍支/(命)奈良祢八

〔本文異同〕○右―左 ○別と―わかれに

〔歌仙絵比較〕(1) 豊の縁B (2) 身体は左、顔は右(左手
をかざす)―身体は左、顔は右 (3) ①垂纓冠。黒の袍。丸
花文の下襲の裾。紅の下襲。窠霰の表袴。紅の大口袴。飾太
刀。②「寛文版本」は菱烏帽子。狩衣で、袖括りの緒あり。下
襲の裾・飾太刀は描かない。表袴は文様なし。左手に笏を持
つ。

〔出典〕『新古今集』卷第十三恋歌三、一一九二番。作者名「藤
原知家」。詞書「(題しらず)」。第二句「ながきわかれに」。
〔作者〕藤原知家 法名蓮性。寿永元年(一一八二)生―正嘉
二年(一二五八)十一月没。七十七歳。正三位左兵衛佐。嘉禎
四年(一二三三)出家。定家に師事。後に反御子左となる。新
古今集初出。

【三〇番】左 西園寺入道前太政大臣 恋わふるなみたや空にくもるらん光もかはる閨の月かけ



〔字母〕(恋) 王不累奈三多也(空) 尔久毛留良无(光) 毛加波留(閨) 乃(月) 可気

〔本文異同〕○左―右

〔歌仙絵比較〕(1) 畳の縁E (2) 右(左立膝か)―右

(3) ①垂纓冠。白地に丸花文の袍。紅の下襲。菊菱文の表袴。

②「寛文版本」は僧綱襟の法体。右手に持つのは笏か。

〔出典〕『新古今集』卷第十四恋歌四、一二七四番。作者名「権中納言公経」。詞書「(千五百番歌合に)」。初句「こひわたる」。

〔作者〕藤原公経 西園寺大相国。承安元年(一一七一)生―寛元二年(一二四四)八月二十九日没。七十四歳。内大臣実宗男。姉は藤原定家室。従二位太政大臣。寛喜三年(一一三一)出家。新古今集初出。

【三二番】右 八条院高倉 いか、ふく身にしむ色のかはるかなたのむるくれの松風のこゑ



〔字母〕伊賀(、) / 婦久(身) 尔 / 志無(色) 乃 / 加波留可奈堂能 / 無累 / 久礼乃(松風) 乃己恵

〔本文異同〕○右―左

〔歌仙絵比較〕(1) 畳の縁B (2) 左―背面 (3) ①丸花文の表衣。菱文の桂。紅の長袴。裳・引腰なし。②「寛文版本」は裳・引腰を描く。

〔出典〕『新古今集』卷第十三恋歌三、一二〇一番。作者名「八条院高倉」。詞書「(題しらず)」。

〔作者〕八条院高倉 嘉禎三年(一二三七)六十歳位で生存。八条院(鳥羽院皇女暲子内親王)女房。新古今集初出。

【三二番】左 小侍従 つらきをも浦見ぬ我にならふなようき
身をしらぬ人もこそあれ



〔字母〕徒良支越裳／（浦見）怒（我）尔／奈良不那与宇幾
（身）遠／志良怒（人）毛已曾安連

〔本文異同〕○左―右

〔歌仙絵比較〕（1）豊の縁B （2）身体は右、顔は背面―右
（3）①裳・引腰。花唐草の表衣。菱文の桂。紅の表袴。②

特記事項なし。

〔出典〕『新古今集』卷第十三恋歌三、一二二七番。作者名「小
侍従」。詞書「題しらず」。

〔作者〕小侍従 建仁二年（一一〇二）八十歳以上で生存か。

石清水別当紀光清の女。二条天皇、太皇太后宮多子、高倉天皇
に出仕。治承三年（一一七九）出家。千載集初出。

【三三番】右 大納言経信 夕日さすあさちか原のたひ人は哀
いつくにやとをかるらむ



〔字母〕（夕日）左寸安左知可（原）乃／堂比（人）八（哀）以
川久／尔／也止越加留良無

〔本文異同〕○右―左

〔歌仙絵比較〕（1）豊の縁B （2）正面（身体の正面に立て
た笏の上に両手を載せる）―身体は正面、顔は左（右手をかざ
す）（3）①垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。笏。

②「寛文版本」では笏を描かない。

〔出典〕『新古今集』卷第十羈旅歌、九五一番。作者名「大納言
経信」。詞書「暮望行客といへるころを」。第四句「あはれい
くよに」。

〔作者〕源経信 長和五年（一一〇六）生―永長二年（一一〇九

七）閏一月六日没。八十二歳。俊頼の父。正二位大納言大宰権
帥。三船の才の誉れ高い。著作『難後拾遺』。後拾遺集初出。

【三四番】左 前大納言忠良 おりにあへは是もさすかに哀也
をたの蛙の夕くれのこゑ



〔字母〕於梨尔／安部半／(是)毛／左寸可／尔／(哀也) 遠多
乃／(蛙)乃／(夕)久礼乃／己恵

〔本文異同〕○左―右

〔歌仙絵比較〕(1) 豊の縁B (2) 右―右 (3) ①垂纓冠。
黒の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。②「寛文版本」では笏を右
手に持つ。下襲の裾を描き、表袴は霰紋。

〔出典〕『新古今集』卷第十六雑歌上、一四七七番。作者名「前
大納言忠良」。詞書「百首歌たてまつりし時」。 ※建仁元年
(一一〇一)二月、老若五十首歌合の歌。

〔作者〕藤原忠良 長寛二年(一一六四)生―嘉祿元年(一二
二五)五月十六日没。六十二歳。摂政基実男。母は藤原顕輔
女。正二位大納言。千載集初出。

【三五番】左 前大納言兼宗 世をすつるこゝろはなをそなか
りけるうしをうしとは思ひしれとも



〔字母〕(世)遠寸徒累／古(、)露八奈遠曾／奈可利介累宇之
遠／宇之止八(思)比／之連止毛

〔本文異同〕○うしをうしとは―うきをうしとは

〔歌仙絵比較〕(1) 豊の縁B (2) 左―左(右手に持った笏
の上に頸を載せる)(3) ①垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花
文の表袴。②「寛文版本」では笏を持つ。下襲の裾を描き、表
袴は霰紋。

〔出典〕『新古今集』卷第十八雑歌下、一七六九番。作者名「権
中納言兼宗」。詞書「五十首歌よみ侍りけるに、述懐の心
を」。第四句「うきをうしとは」。 ※建久九年(一一九八)
頃、御室五十首の歌。

〔作者〕藤原兼宗 長寛元年(一一六三)生―仁治三年(一二
四二)九月三日没。八十歳。内大臣忠親男。正二位大納言。千
載集初出。

【三六番】右 藤原清輔朝臣 とし経たるうちの橋守こと、はむいくよになりぬ水のみな上



〔字母〕止之（経）太累宇知乃／（橋守）己止（、）八武以久／与尔奈里怒（水）能三那（上）

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕（1）畳の縁B（2）右―右（右手に持った笏を肩のあたりに上げる）（3）①菱烏帽子。黄土色の地の丸文の袍。②「寛文版本」では笏を持つ。

〔出典〕『新古今集』巻第七賀歌、七四三番。作者名「清輔朝臣」。詞書「嘉応元年、入道前関白太政大臣、宇治にて、河水久澄といふ事を人人によませ侍りける」。※嘉応元年（一一六九）十一月、宇治別業和歌の歌。

〔作者〕藤原清輔 長治元年（一一〇四）生―安元三年（一一七七）六月二十日没。七十四歳。七十歳という伝もある。左京大夫・顕輔男。重家・顕昭・季経の兄。太皇太后宮大進、正四位下。中古六歌仙。『続詞花集』撰者。千載集初出。

《考察》

一、撰歌対象について

「文情絵短冊」所収歌は、凡例にも少しく述べたが、すべて『新古今集』に収められている。「樋口論文」が取り上げた歌合と同一の歌合である。三六番の清輔歌のように他出の多いものもあるが、一七番の俊成女の和歌は、『新編国歌大観』の範囲内ではあるが、『新古今集』以外に他例が見当たらないことから、『新古今集』を出典と見てよからう。「樋口論文」では、これを「すこぶる異色」と述べている。

ここであらためて、「文情絵短冊」を部立ごとに整理してみよう。

春上…五首 春下…三首 夏…四首 秋歌…五首

秋下…三首 冬…四首

恋一…一首 恋二…二首 恋三…四首 恋四…一首

羈旅…一首 雑上…一首 雑下…一首 賀…一首

春上と秋上がともに五首、春下と秋下がともに三首で、春上下、秋上下で合計すると各八首となる。その半数の四首が夏と冬の歌である。また、恋一から四までの恋部の歌が計八首で、春上下、秋上下と同数になっている。「樋口論文」に「部立ごとの選出は一応整然としている」「全体の組織はかなり神経が配られている」と指摘されているように、全体の構成は、部立

ごとに歌数のバランスが考慮されているようである。

また、恋の段階もいよいよ終末の恋五からは採歌していないことや、わずか一首ではあるが賀歌を配することも、本秀歌撰の撰歌態度として留意される。屏風や襖などに貼るといったことが、撰歌時点での目的のひとつであったとするならば、哀傷部や離別部からの採歌がないのも頷けよう。

なお、本歌合に選ばれた三十六人の歌人であるが、必ずしも新古今時代の歌人ではないことは、「樋口論文」が指摘するところであった。いま、各歌人の勅撰集に歌を取られた初出を一覧すると、次のようになる。

後拾遺集・能因・経信(二人)

金葉集・基俊・俊頼(二人)

詞花集・俊成・頼政・西行(ただし「読人しらず」・崇徳院(四人)

千載集・定家・良経・寂蓮・頼実・慈円・顕昭・長明・有家・丹後・家隆・式子内親王・兼実・讃岐・実定・小侍従・忠良・兼宗・清輔(十八人)

新古今集・後鳥羽院・宮内卿・雅経・俊成女・通光・通具・秀能・知家・公経・高倉(十人)

このような観点からも、院政期以降、とくに新古今前夜から勅撰歌人となり活躍していた歌人の多さが認められよう。

二、左方・右方の別について

「文情絵短冊」には、「寛文版本」と同様に、「左」「右」が明記されている。「寛文版本」の歌順に倣って短冊を並べた場合、一番後鳥羽院から一六番宜秋門院丹後と、三五番兼宗・三六番清輔の十八首は、「寛文版本」と同じく「左」「右」の順である。しかし、一七番俊成女から三四番忠良までの残りの十八首は、「右」「左」の順となり。「寛文版本」とは左右が逆に記されている。

そこで、これらの「右」「左」の短冊を「左」「右」の順に入れ替えると、歌仙絵の対が背中合わせになる箇所が出てくる(この点については後述)。ここはやはり、「文情絵短冊」の左右表記の誤りと見るべきだろう。

三、作者名表記について

作者名表記に「寛文版本」との本文異同がある歌は六首ある。いま、「文情絵短冊」―「寛文版本」の順に列挙する。

四番 ○雅経―参議雅経

六番 ○後京極撰政前太政大臣―後京極撰政太政大臣

一二番 ○大僧正慈円―前大僧正慈鎮

一七番 ○皇太后宮太夫俊成卿女―俊成卿女

一九番 ○後久我太政大臣通光―後久我太政大臣

二四番 ○崇徳院御製―崇徳院

官職を記さない四番雅経もあるが、一七番「俊成卿女」に俊成の官職名「皇太后宮太夫」を付けたたり、一九番「後久我太政大臣」に「通光」と名を明記したりというように、いささか説明的に過ぎる点が見受けられる。また、一番を「後鳥羽院」と記すならば、二四番も「崇徳院」でよからう。「御製」が付いているのは、あるいは勅撰和歌集における慣用により記してしまつたものか。

なお、「樋口論文」は、作者名表記から、「本歌合の成立は、寛元四年一二月以後ではあつても、その下限は定めがたい」と述べている。

四、和歌の本文異同について

和歌本文の語句の異同が「文情絵短冊」と「寛文版本」との間で生じているのは次の五首である。

一番 ○あふさかの山―あふさかの関

四番 ○こえすて、―わけすて、

一九番 ○くたすか―わたすか

二九番 ○別と―わかれに

三五番 ○うしをうしとは―うきをうしとは

二九番の異同は、「と(止)」と「に(尔)」の字形の類似か

ら生じた誤写の可能性を指摘できるだろう。

四番の「こえすて、」という句は、『新編国歌大観』では例が見当たらない。一方、「わけすて、」は、正治二年(一一二〇)秋に後鳥羽院が詠進させたという『正治初度百首』において慈円が詠んだ「さをしかの夏野の草を分けすて太山の秋にうつるはつ声」(秋・六四〇)という歌に先行例が見える。この慈円歌が最も早い例か。いずれにせよ中世和歌として特徴的な表現ではある。『文情絵短冊』は、第二句「かさなるやまを」に続く表現として「こえ(越え)……」と記してしまつたと推察される。

同様に三五番も、「文情絵短冊」の「うしをうしと(は)」という表現は『新編国歌大観』に例を見ない。文法的にも「うきをうしと(は)」とすべきであり、先行例には西行の「うきをうしとおもはざるべき我がみかは何とて人の恋しかるらん」(西行法師家集・七三七・東国修行のとき、ある山寺にしばらく侍りて)がある。この表現も先蹤はこの西行歌と思しい。先の「わけすて、」と併せて、「文情絵短冊」では、中世和歌の特徴的な表現の一部に本文異同が生じているようである。

一方、一番の「あふさかの山」は、『新古今集』他、『後鳥羽院御集』一五七一番でもこの本文を採る。「寛文版本」の「あふさかの関」という本文は『井蛙抄』一二七番にも見えるが、

『新古今集』の詞書に「関路鷲」とあることから「あふさかの関」の異文は生じやすかったのであろう。また、この結題で「関」を詠むのはいささか題に付きすぎる。こゝは「あふさかの山」本文を採るのが妥当だろう。

また、一九番は、「文情絵短冊」の「たかせぶね くだすか」という本文が、『新古今集』の他、『自讃歌』四八番や『題林愚抄』四三一五番でも享受されているようである。「くたす」と「わたす」とでは仮名一文字の違いであるが、「寛文版本」の本文の誤りを指摘すべきであろう。なお、「ふね」を「わたす」という表現も、意味上生じやすい異同ではあろう。「あふさかの山」と「たかせぶね くだすか」の二例は、「文情絵短冊」が「寛文版本」に拠らず、より適切な本文を採っていると言えそうである。

五、歌仙絵について

(1) 豊の縁の柄

「文情絵短冊」では、歌仙は豊の上に描かれる。豊の縁の柄は、次の五種類に分けられる。

豊の縁A 後鳥羽院・式子内親王・崇徳院(三人)

豊の縁B 定家・宮内卿・雅経・能因・俊成・寂蓮・基俊・

頼政・慈円・顕昭・長明・有家・丹後・俊成

女・西行・家隆・通具・秀能・讃岐・俊頼・知家・高倉・小侍従・経信・忠良・兼宗・清輔
(二十七人)

豊の縁C 良経・頼実(二人)

豊の縁D 通光・兼実・実定(三人)

豊の縁E 公経(一人)

一瞥してわかるように、豊の縁Aはいわゆる纏縹縁で、皇族に限られる。「寛文版本」でも茵の上に描かれる三人である。また、CからEの計六人は、「文情絵短冊」における太政大臣・左大臣といった大臣クラスの歌人すべてである。三種類の柄があるが、Cは赤と青の縦縞、Dは赤と青の縦縞の間に鎖柄が入る。Eは唯一、公経のみに用いられた亀甲柄である。これ以外のBが最も多く、二層の縁の上部は、中心に白い点のある群青色の丸と、丸に十文字が交互に描かれ、下部は流水文である。この模様は、多くの歌仙絵の豊縁にも見られるものである。

(2) 歌仙絵の身体や顔の向き

先にも少しく触れたが、左右に分けられた歌仙絵の場合、身体や顔の向きは、基本的には、背中合わせにならないのが原則であろう。「寛文版本」においても、同じ方を向いた対はあるが、顔が双方ともに外を向いている対は見られない。「文情絵短冊」も同様に、「寛文版本」の歌順に倣って並べたとき、背

中合わせの対は生じない。

一番の後鳥羽院から一六番の宜秋門院丹後まで、および三五番の兼宗と三六番の清輔の九対は、左方は向かつて左、右方は向かつて右を向いていることで、左右の順に配置すると歌仙が向かい合う構図になる。この部分は、「寛文版本」と左右が一致している箇所である。ちなみに、「寛文版本」の歌仙絵の顔や身体の向きは、式子内親王と高倉が後ろ向きであるのを除けば、程度の差こそあれ、すべて左か右を向いている。

それでは、「寛文版本」とは左右が逆になっている残りの歌仙絵ではどうかといえ、一九番右・二〇番左、二三番右・二四番左、二七番右・二八番左の三対は、右方は左、左方は右を向いており、右・左の歌順で歌仙は向き合う。また、片方の歌仙が正面や後ろ向きの場合、相手方が右なら向かつて左、左なら向かつて右を向いていれば、それも画面として落ち着いたものになる。すなわち、二一番右の通具は正面を向いて右腕で頬杖をついているが、二二番左の秀能が右を向く。また、三一番右の高倉は左を向き、三三番左の小侍従は正面に背を向けてわずかに頭を画面右に寄せている。三三番右の経信は立てた笏の上に両手を置いて正面を向き、三四番左の忠良は右を向く。

先の三対にこの三対を加えた六対は、歌仙絵の顔や身体向きからも、右・左の順で並べると、背中合わせになったり、正

面や後ろ向き対になる方が外側を向いたりするものはない。「寛文版本」の歌順に倣うと、「文情絵短冊」の右・左の対は、この順で適切な組み合わせになっていると言えそうである。この部分の「文情絵短冊」における右・左の記載は、歌仙絵の面から見ても、右は左、左は右の誤写の可能性が示唆されている。

なお、「文情歌仙絵」の残り三対、すなわち一七番右・一八番左、二五番右・二六番左、二九番右・三〇番左は、すべて向かつて右を向く。歌仙絵の対が同じ方向を向いている例は、先に触れたとおり「寛文版本」にも見受けられる。

(3) 装束

本項では、歌仙絵を男性、女性、僧に分けて考察する。

i 男性装束の分類

「文情絵短冊」三十六枚のうち、三分の二の二十四枚は、男性歌人の短冊である。このうち、冠を被っているのは二十一人。垂纓冠が十八人、巻纓冠が三人である。さらに、袍の色や文様、持ち物などを考慮して分類すると次のようになる（大文字のアルファベットは前述の量の縁の種類を表す）。残り三人は烏帽子を被る。

a 垂纓冠

(イ) 紺青の袍・紅の長袴

後鳥羽院A・崇徳院A

- (ロ) 朱の袍・窠叢の表袴 良経C(従一位摂政太政大臣)
 (ハ) 白の袍 兼実D(従一位関白太政大臣)・実定D
 (正二位左大臣)・公経E(従一位太政大臣)
- (二) 黒の袍 臣
- ・飾太刀 窠叢の表袴 知家B(正三位左兵衛佐)・
 通光D(従一位太政大臣)
 格子に窠の表袴 頼実C(従一位太政大臣)
 叢紋の表袴 頼政B(従三位右京権大夫)
- ・丸花文の表袴 定家B(正二位権中納言)・俊成B(正三位皇太后宮大夫)・有家B(従三位大藏卿)・通具B(正二位大納言)・経信B(正二位大納言)・忠良B(正二位大納言)・兼宗B(正二位大納言)
- ・三つ輪文の表袴 家隆B(従二位宮内卿)
- b 巻纓冠・綾
- (ホ) 黄土色の袍 雅経B(従三位参議)
 (ヘ) 群青色の袍 秀能B(従五位上出羽守)・俊頼B(従四位上木工守)
- c 烏帽子
- (ト) 立烏帽子 長明B(従五位下)

(チ) 葵烏帽子 基俊B(従五位上左衛門佐)・清輔B(正四位下太皇太后宮大進)

aの垂纓冠を被った歌仙絵のうち、分類(イ)は院(帝)である。長袴の裾口が背後に大きく靡くように描かれている。これはつとに、『天子撰関御影』(十四世紀、藤原為信・豪信画、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵。カラー画像は、続日本の絵巻12『隨身庭騎絵巻 中殿御会図 公家列影図 天子撰関御影』(小松茂美編、中央公論社、一九九一年二月)他参照。)において、二条院・四条院・今上(後光厳天皇)の御影に見られる御引直衣の描写である。「文情絵短冊」が、院を天皇在位中の姿、しかも青色の袍に紅(緋)の長袴という、色目としても有職に適った御引直衣姿で描いていることに留意したい。これは、延宝六年(一六七八)刊、菱河師宣画『百人一首像讚抄』(以下、「像讚抄」と略す。)の天智天皇をはじめとする帝の装束にも見られるものである。また、分類(ロ)の朱の袍と(ハ)の白の袍、そして分類(二)の黒の袍のうち、飾太刀を持つ通光と頼実は大政大臣であり、以上で、前述の畳の縁の種類ACDEすべてとなる。それ以外の分類(二)の黒い袍は、正二位から従三位の人物で、畳の縁の分類Bに当たる。下襲の裾が描かれる良経・頼実・通光・知家は、みな飾太刀を身に付ける。これもまた、有職に適っている。白い裾も、あるいは冬の装束を意識

したものか。このように、「文情絵短冊」は、「寛文版本」に比べ、有職に照らした装束の描き方が見受けられる。

b巻纓冠・袴は、いわゆる巻纓冠で武官の装束である。分類(ホ)の雅経は、「寛文版本」でも「文情絵短冊」と同じく武官の装束であるが、分類(へ)の秀能は菱烏帽子に袍、俊頼は垂纓冠に黒の袍で、武官の姿ではない。「文情絵短冊」において、秀能が武官装束なのは、北面の武士であったことに拠るものであろう。また、俊頼については、右近衛少将であったことに拠るものか。なお、「像讚抄」において、巻纓冠・袴と飾太刀、叢紋の表袴といった装束を身に付けたものには、左近衛番長・右衛門府生を歴任した壬生忠岑の歌仙絵がある。

ii 女性歌仙絵の装束と構図

女性の装束については、男性に比して自由な面があるだろうが、女性の朝服である裳と、後ろに長く垂らした引腰が描かれているか否かは押さえておく必要があるだろう。「文情絵短冊」では、女性歌人、七人のうち、宮内卿・丹後・讃岐・小侍従の四人には、裳と引腰が描かれている。

また、「文情絵短冊」では式子内親王にのみ几帳を描いている。式子内親王の歌仙絵として、ひとつの型になっている構図である。「文情絵短冊」では几帳の陰からややうつむいた顔のぞかせているが、「寛文版本」では几帳の陰に後ろ姿を描く。

また、「像讚抄」では几帳の陰の横顔を見せている。

なお、「文情絵短冊」で後ろ姿なのは小侍従であるが、「寛文版本」では高倉である。女性歌人についても、「文情絵短冊」の歌仙絵と「寛文版本」との共通性は意外に低く、別の粉本の存在が察せられる。

iii 僧形の分類

「文情絵短冊」の歌僧は五人であるが、このうち僧綱襟なのは能因・寂蓮・慈円の三人である。ただし、「寛文版本」では、寂蓮・慈円(「寛文版本」では慈鎮)は同様に僧綱襟であるが、能因は黒法衣である。能因を僧綱襟で描く例は、「像賛抄」にも見られる。ちなみに、西行の黒法衣姿は一般に定着しており、「寛文版本」「文情絵短冊」でも黒法衣で描かれている。なお、顕昭は、「文情絵短冊」では、脱いだ表衣の上に座っているように見えるが、これにも粉本があるか。「寛文版本」では表衣を着用した姿である。

ところで、公経(西園寺入道前太政大臣)は、「寛文版本」では僧綱襟の法体であるが、「文情絵短冊」では、前述のとおり、白の袍で、畳の縁の種類は本作品でも唯一という、在俗時点の上級貴族の姿である。「像讚抄」でも貴族の姿で描かれる。

総じて「文情絵短冊」の男性歌人の歌仙絵は、若い頃の顔や装束で描かれる傾向があるように見受けられる。公卿の青年が

用いるという窠叢の表袴を、良経・通光・俊頼・知家が着用している点は、有職を理解して描いたものか俄に決し難いとしても、後鳥羽院や定家、良経、俊成などの顔には若いみずみずしさが感じられる。また、公経についても、壮年期らしい貴族の姿と見られよう。これらの点は、先に触れた『天子撰関御影』において、二条院（二十三歳にて崩御）や四条院（十二歳にて崩御）を若い姿で描くのは一線を画すであろう。こういった側面からも、「文情絵短冊」の制作意図を類推することがあるいは可能かもしれない。

六、まとめと今後の課題

以上、「文情絵短冊」の本文と歌仙絵について基礎的な考察を行ってきた。「寛文版本」と比較すると、本文には、誤写の可能性を有する部分も少なからず存するが、「寛文版本」の誤りを継承していない箇所もあることから、「寛文版本」の他に参看した文献があることが推察される。

歌仙絵についても同様で、「寛文版本」が版本ゆえか、装束を比較的簡略に描くのに対し、「文情絵短冊」は、とくに男性歌人について、有職の知識や歌人の経歴がある程度反映させた図柄で装束を描く。また、若年時、あるいは在俗時の顔や姿を反映した図柄を採る傾向が認められる点にも留意しておきた

い。

今後は、「新三十六歌仙」諸本間の本文の検討に加え、中世以降の肖像画（似絵）の系譜をも参看しながら、『百人一首』他の歌仙絵を視野に入れた図柄の分析を、分野横断的に進める必要があるだろう。本稿がそのための一助になれば幸いである。

附記

本稿は、「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」（同志社大学人文科学研究所第21期研究会第6研究、二〇二一～二〇二四年度、科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号20K12565、二〇二〇～二〇二三年度）、および同志社大学宮廷文化研究センター（二〇二一～二〇二五年度）における研究成果の一部である。

本稿執筆にあたり、石野浩司氏には多くの御教示を賜った。ここに厚く御礼申し上げる。

（第21期第6研究会による成果）